

姫路城で世界遺産をささやく

皆さん、こんにちは。世界遺産検定マイスターの玉田です。前回投稿をしたスリランカ旅行から、はや2カ月。まだまだ厳しい寒さが続きますね。今回は、1月に訪れた“姫路の旅を中心に”ささやきます。(私の地元は愛媛県で、姫路と同じく“ひめ”が名前に含まれていますが、某県で愛媛出身と自己紹介をした時、「姫路城がありますよね」と返されました……)

今回も(というか常に)1人旅です。姫路城近くのビジネスホテルにチェックインをした後、居酒屋を求めて、街へ繰り出しました。駅前を歩いていると、“姫路のれん街”という提灯が見えてきました。美味しい姫路料理が出てきそうな、そんな匂いがプンプンします。ずらっと並ぶ店の1つに入って、メニューを見ると、“姫路名物 ひねぼん”とあります。「これだ!」とすぐに注文をして、“ひねぼん(鶏料理)”を肴に地酒を一杯。「美味い!」と満喫して、明日への英気を養いました。

翌日、天候は雨(涙)。「雨の姫路城は風情があるなあ〜」と自分に言い聞かせながら、お城へ。堀を埋め立てた広い道を進んで行くと、姫路城が見えてきました。「おお、本当に真っ白だ!」シェーンブルン宮殿のマリア・テレジア・イエローを見た時以来の感動です。白鷺城と言われるだけのことはあります(“平成の大修理”で白漆喰にかかった費用は、約24億円だそうです)。



真っ白な姫路城



真っ黄色なシェーンブルン宮殿

さて、今回もガイドさんに案内をしてもらいました。入城して、最初に気になったのが、壁の○・△・□の狭間（矢や鉄砲などを用いる小窓）です。これは、「お前は○に行け、△に行け」と素早く部下を動かすための工夫です。

さらに進むと、少し変わった石垣が見えてきました。左半分は、池田輝政の時代に加工した石が積まれた打ち込み接ぎ、右半分は殆ど加工されていない野面積みの石で、羽柴秀吉の時代に詰まりました。阪神・淡路大震災の時に、打ち込み接ぎの石垣は被害を受けましたが、野面積みはあまり被害を受けませんでした。秀吉の築いた野面積みは、石の間にグリースの役割を任う砂を入れることで、崩れにくくしていたのです。さすが、秀吉！ 天下人になる人は違います。また、石垣には墓石や古墳の石棺も使われたというのです。石を持って来ないと、輝政から打ち首を命じられるので、部下は必死で石を集めたとのことですが、そこまでやらなければいけないとは……。

いよいよ、大天守の中に入ります。進んでいくと、1本の柱の前でガイドさんが立ち止まり、「この柱だけ逆柱ですよ」と教えてくれました。私が、「それは日光東照宮の陽明門と同じですね」（世界遺産大事典より）と言うと、「へえ〜、お客さん、良く知っていますね」と感心してくれました。世界遺産検定の勉強を頑張った甲斐がありました。ちなみに、日光東照宮の陽明門では、建物は完成と同時に崩壊が始まる、という伝承から、あえて建物を未完成し、1本だけ逆柱になっています。大天守を築いた輝政が、徳川家康の娘婿であることを考えると、姫路城の逆柱も同じ理由かもしれません。また、輝政の家紋“揚羽蝶”を逆さにした“逆さ揚羽”の瓦も発見されています。彼こそ、“THE 逆さ好き”。

“逆さ”以外にも、大天守には、面白い工夫がたくさんあります。例えば、東大柱・西大柱です。昭和の大修理の際、東大柱には永遠を願う和歌が、西大柱には当時の社会情勢を記したものが、それぞれ埋め込まれました。二本の柱を見ながら、「当時の人たちは今の日本を想像できたのだろうか」、「このタイムカプセルが開けられる時、日本はどうなっているだろうか」と、両柱に過去と未来への想いを馳せました。



西の丸から男山を拝む

大天守の後は、西の丸を見学しました。西の丸は、千姫（徳川秀忠の娘）が本田忠刻（本田家は当時の姫路城城主）に嫁いだ時の化粧料 10 万石で建てられました。10 万石は今の金額にすると約 43 億円！ さすが、將軍の娘です。しかし、前夫の豊臣秀頼は大阪の陣で亡くなり、忠刻の間に生まれた息子も幼くして亡

くなります。千姫は、「亡き秀頼や」と、わが子のことを想って、西の丸から見える男山の天神社を拝んでいたそうです。ふと、脳裏に千姫と対照的な 1 人の女傑が浮かんできました。それは、18 世紀、神聖ローマ帝国の“女帝”として君臨し、前述のシェーンブルン宮殿を完成させた、マリア・テレジアです。彼女は、当時としては珍しく、初恋の男性と恋愛結婚をし、なんと 16 人の子供に恵まれました（その 1 人は、フランス革命で最後を遂げるマリー・アントワネットです）。また、後のドイツ帝国の核心であるプロイセン、フランスといった強国の男王と対等に渡り合いました。人生、いろいろですね。ちなみに、私はマリア・テレジアのファンですが、それ以上に、彼女のライバルであった、プロイセン王フリードリヒ 2 世の大ファンでもあります。彼が築いたサン・スーシ宮殿（世界遺産）も素敵です。ドイツに旅行される時は、ぜひ足を運んでください。

はっ！ すいません、話が脱線してしまいました。姫路城に話を戻します。木造の城で世界最大級の姫路城、その最も凄いところは、戦争で大きな被害を受けず、現在までその姿をほぼ残していることだと思います。第二次世界大戦下で、姫路市が B-29 の空襲で焦土となったのに、姫路城は無事でした（西の丸で不発弾が見つかった程度）。「これは奇跡以外の何物でもない！」と思って、ガイドさんにその話をすると、次のようなことを教えてくださいました。

戦後、B-29 隊員だった方が姫路に招かれて、講演された際、客席から「姫路城を爆撃するな、という指示があったのか」という質問が出ました。答えは「No」。夜間襲撃だったので、“黒い姫路城”が、沼地に見え、爆撃されなかったのです。

黒い姫路城とは、どういうことでしょうか？

実は、1941 年、市民の方が役所を動かして、多額の資金と労力をかけて、城を黒布で覆ったのです（西の丸に布をかけたフックは、今なお残っています）。

戦時下の大変なさ中で、なんて大胆な発想と行動でしょうか。“世界遺産の保全には地域の力が不可欠”だと、あらためて思いました。



黒布で覆われた姫路城

以上、“姫路城のささやき”でしたが、「ひめ」繋がりで、私の地元、愛媛県松山市も紹介させてください（少し無理がありますが）。

松山には、姫路城と同じく白漆喰で現存 12 天守の 1 つである松山城があります。松山城では、地元の高校生たちが観光客の方の写真を撮る“シャッターボランティア”、甲冑の着付けの手伝いをする“甲冑着付けボランティア”が活躍し（不定期）、地域の文化財で若者の力が活用されています。また、日本最古の温泉、道後温泉（日本書紀にも登場）には、近年、女子旅で訪れる方も増えています。皆さんもぜひ愛媛県へ！ という地元のアピールをして、今回のささやきを終わりにします。

「だんだん」

（松山城の帰りのロープウェーでアナウンスされる、「ありがとうございました」という愛媛の方言）